

B-2

ベトナム語南部方言の形成過程における発芽音の音韻化の役割

—クアンナム方言の事例より—

通山 絵美 (京都大学 経営管理研究部)

toyama.emi.7z@kyoto-u.ac.jp

要旨

ベトナム語は一般的に北部方言、中部方言、南部方言の3大方言群に大別される。一般に古い形式を残す中部方言や、正書法の基礎となった北部方言とは異なり、南部方言は数世紀間に発達した新しい方言群とされる(Hoàng 2009)。本研究では、南部方言が形成される過程で発芽音(sprout sound)の生起と音韻化が通時的に生じた可能性を指摘し、その生起環境を検証する。発芽音とは Schubiger (1970, 小泉(訳) 1973: 101-103)のドイツ語方言研究において「ある音声の位置からすぐ次の音声の位置へ達するのに必要な音声器官の運動が同時に行われないうちに起こる」音と定義される。本研究では音節構造(C₁)V(C₂)/TにおけるC₁とVの間もしくはVとC₂の間に生起し、後に独立した音素となるわたり音(glide)を発芽音と定義し、発芽音の生起と音韻化が最も顕著に認められた事例として、南部方言に属するクアンナム(Quảng Nam)方言の通時的音変化を挙げる。

1. はじめに

クアンナム(Quảng Nam)方言はベトナム南中部地方沿岸地域のクアンナム省の一部で使用される諸方言群であり、ベトナム語3大方言のひとつである南部方言の下位方言である(Hoàng 2009)。同国ホーチミン市に分布し南部方言において最大話者数を誇るホーチミン市のサイゴン(Sài Gòn)方言や、北部方言を代表し且つ標準語の基礎とされるハノイ方言と比較すると、特殊な音韻対応を呈する。同省は15世紀以降のベトナム北部・北中部地方(現タインホア省、ハティン省、ゲアン省周辺域)からの移民により成立したとされる(Đặng Thu 1994 : 86-89, Lý 2006 : 137, Hoàng 2009)。

2. 研究の背景

クアンナム方言に関する最初の研究は Vurong (1974)である。Vurong (1974)は同省ホイアン市に分布する方言の音韻記述を行い、ベトナム語諸方言には見られない母音の存在¹/a/を指摘している。

(1) Vurong (1974)によるホイアン方言の特徴的な韻

	ハノイ方言	サイゴン方言	クアンナム方言	
			Vurong (1974)	筆者
魚 cá	ka ⁴	ka ⁴	koa	koɔ ⁴ [kɔa ⁴]
二 may	măi ¹	mai ¹	ma	ma ¹ [ma ¹]
星 sao	sau ¹	şau ¹	so	so ¹ [şo ¹ ~so ¹]
男の子 trai	caï ¹	ţai ¹	toe	təɔ ¹ [təɛ ¹ ~tʃʌ ¹]

また、上述の母音以外にも、表1のような特徴を有することが Cao (1986) で確認されている。通時的考察として、ホイアン市近隣地域に分布する方言にみられる韻(Rhyme)の体系に着目した Cao (1986)や、ダイロック県に分布する方言を対象とした Shimizu (2012; 2013)があり、ベトナム語正書法に基づく音韻体系と

表 1 韻の比較 (Cao 1986)

標準体系	クアンナム方言
標準語における /-ɔj/	[u:ɔ]
標準語における /-aj/	[u:ɔ] または [ɾ:ɔ]
標準語における /-aw/	[ɔw] または [oʷ]
標準語における /-āj/	[æ:]
標準語における /-āw/	[ɑ:]
標準語における /-am, -ap/	[ɔ:m], [ɔ:p]
標準語における /-ɔm, ɔp/	[o:m], [o:p]
標準語における /-am, -ap/	[ɑ:m], [ɑ:p]
標準語における /-ām, -āp/	[ɑ:m], [ɑ:p]
標準語における /-ɑ̃m, -ɑ̃p/	[ɑ̃:m], [ɑ̃:p] (Cao Xuân Hạo は [ɑ̃ ^w ɲ̃m], [ɑ̃ ^w k̃p] と記述)
標準語における /-õm, -õp/	[õ:m], [õ:p] (Cao Xuân Hạo は [ɔ̃ ^w ɲ̃m], [ɔ̃ ^w k̃p] と記述)
標準語における /-aŋ, -ak/	[a:ŋ~ɑ:ŋ], [a:k~ɑ:k]
標準語における /-āj, -āk/	[ɛ:ŋ~ɛəŋ], [ɛ:k~ɛək]

報告している。Hoàng (1991)、Shimizu (2013) は 18 世紀～19 世紀における広東、福建、潮州等、中国南方からの移民との言語接触の可能性を指摘している。これらの先行研究では、ベトナム語の他の方言には見られない特殊な対応関係に着目し、特に母音や韻に関する音声学的事実が報告されてきた。しかし音声事実を重視するあまり音韻体系の整合性に乏しく、一部の音韻表記には解釈の余地が残されていると考える。また、その通時的な音変化については、ハノイ方言や正書法体系との比較により議論されてきたが、今回はそれに加え比較による祖形の再建を試みた。なぜ同方言がこのような形式を持つに至ったのか、その音変化を誘発する要因として、音節構造の特徴と発芽音の生起に着目した。これまで共時的考察において、その音声事実として発芽音、もしくはわたり音に言及した先行研究は存在するが、ベトナム語の通時的音変化における発芽音の生起と音韻化の過程については、管見の限り報告がない。

の比較により、同方言の音変化の過程を示している。Cao Xuân Hạo (1986) や Shimizu (2012; 2013) は通時的に *a>ɔ の音変化が生じたことを示唆している。Vuong (1974) に始まる先行研究においても、正書法に基づく音韻体系における母音/a/が、クアンナム方言では母音/ɔ/で実現されることが指摘されている。通山(2019)では、この音変化の実態は母音/a/直前位置への [ɔ] の挿入と分析したが、その変化過程そのものの原因はなお不明であり、言語接触に起因するものである可能性も考えられる。Pham (2017) は、クアンナム省の成立における入植の歴史を踏まえて、円唇性をもつ広母音/a/[ɔa~ɑ]に着目し、ベトナム北中部のハティン(Hà Tĩnh)省に分布する方言とクアンナム方言の母音体系の類似性を



図 1 クアンナム省全体図



図 2 調査地

2.1. 発芽音

Schubiger (1970, 小泉(訳) 1973: 101-103)のドイツ語方言研究では、「ある音声の位置からすぐ次の音声の位置へ達するのに必要な音声器官の運動が同時に行われないうきに起こる」音と定義される。本研究では、音節構造 (C₁)V(C₂)/T において、C₁とVの間もしくはVとC₂の間に生起するわたり音(glide)を発芽音と定義する。本研究における発芽音の特徴を以下にまとめる。

- ・ 弁別的機能を持たず、方言話者にはその存在を意識されないことが多い。
- ・ 特に南部方言では聞こえ度が大きく実現される。
- ・ 共時的には音声的特徴として捉えるが、通時的に音韻化して独立した音素となると考えられる。

(2) 発芽音を持つ音節

	ハノイ方言 (HN)	サイゴン方言 (SG)	クアンナム方言 (DL, DB, HA)	(DX, TB)
姉 <i>chị</i>	/ci ⁶ / [ci ⁶]	/ci ⁶ / [cɛi ⁶]	/ci ⁶ / [cɛi ⁶]	/ci ⁶ / [cɛi ⁶]
四 <i>tu</i>	/ti ¹ / [ti ¹]	/ti ¹ / [tɔi ¹]	/ti ¹ / [tɔi ¹]	/ti ¹ / [tɔi ¹]
飯 <i>com</i>	/kəm ¹ / [kəm ¹]	/kəm ¹ / [kəũm ¹]	/kəm ¹ / [kəũm ¹]	/kəm ¹ / [kəũm ¹]
遊ぶ <i>chơi</i>	/cəi ¹ / [cəj ¹]	/cəi ¹ / [cəj ¹]	/cəi ¹ / [cəũj ¹]	/cəũ ¹ / [cəũ ¹]

2.2. ベトナム語の方言

ベトナム語は一般的に北部方言、中部方言、南部方言の3大方言群に大別され、本研究もこの分類に従う。一般に古い形式を保持する中部方言や、現代のベトナム語正書法の基礎となった北部方言とは異なり、南部方言は数世紀間に発達した最も新しい方言群とされる(Hoàng 2009)。また、北部方言と比較すると、中部方言および南部方言は下位方言に大きな差が見られ、下位方言によって語彙的、音声的に異なる形式で実現されることがある。3大方言の音声音韻的特徴、方言分類を以下に示す。

(3) Hoàng (2009)におけるベトナム語の方言区分

- 北部方言：タインホア省以北
- 中部方言：ゲアン省~トゥアティエン・フエ省
- 南部方言：ダナン市以南

以下に北部方言、南部方言、クアンナム方言の音韻体系を示す。

(4) 北部方言(ハノイ方言)の音韻体系

- 音節構造：(C₁)(C₂)V(C₃)/T
- 頭子音 C₁：/b, m, f, v, t, t^h, d, n, z, s, l, c, ɲ, k, x, ɲ, ʎ, h/
- 介音 C₂：/w/
- 母音 V：/i, i, u, e, ə, ə̃, o, ε, a, ă, ɔ, iə, iə, uə/
- 末子音 C₃：/m, p, n, t, ɲ, k, ɲ, ʎ/
- 声調 T：Tone 1(level [33])、Tone 2(low level [22])、Tone 3(falling [31])、Tone 4(broken [274])、Tone 5(rising [25])、Tone 6(glottalized [2?])

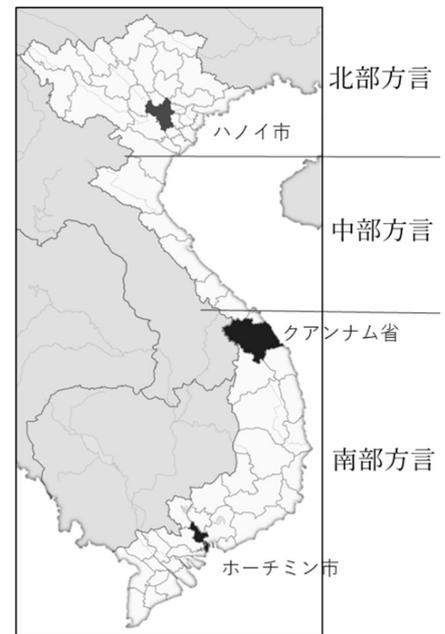


図3 ベトナム語方言区分(Hoàng, 2009)

介音/w/は唇音性を持つ頭子音や、円唇母音と共起しない。軟口蓋末子音/ŋ, k/について、前舌単母音と結合する場合[ŋ, k]で、後舌単母音と結合する場合[ŋ̄m, k̄p]で実現される。とりわけベトナム語方言学においては、ハノイ方言はベトナム語正書法体系と同様、共時的考察において基準となる音韻体系と見做される場合が多い。

(5) 南部方言(サイゴン方言)の音韻体系

音節構造：(C₁)(C₂)V(C₃)/T

頭子音 C₁：/b, m, f, t, t^h, d, n, s, l, r, ʈ, ʂ, c, ɲ, ʝ, k, x, ŋ, ɣ, h/ 介音 C₂：/w/

母音：/i, ī, ī̄, u, e, ə, ə̄, o, ɛ, a, ǎ, ɔ, iə, iə̄, uə/ 末子音：/m, p, n, t, ŋ, k, ŋ^w, k^w, ʝ, ɣ/

声調：Tone 1(level [33])、Tone 2(low level [22])、Tone 3(falling [31])、Tone 4(rising [25])、Tone 5(glottalized [2?])

介音/w/は上述のハノイ方言に見られる共起制限に加え、歯茎頭子音や口蓋頭子音と共起しない。

(6) クアンナム方言の音韻体系

音節構造：(C₁)V(C₂)/T

頭子音 C₁：/b, m, f, v, ʋ, t, t^h, d, n, s, l, r, ʈ, c, ɲ, ʝ, k, k^h, ŋ, k^w, k^{hw}, ŋ^w, ɣ, h/

母音 V：/i, e, ɛ, ī, ī̄, ə, a, ǎ, u, o, ɔ/ 末子音 C₂：/m, p, n, t, ŋ, k, ŋ^w, k^w, ʝ, ɣ, ʔ/

声調 T：Tone 1(level [33])、Tone 2(low level [22])、Tone 3(broken [2?4])、Tone 4(rising [25])、Tone 5(glottalized [2?2?])

上述の 2 方言と異なり、頭子音(C₁)と主母音(V)の間に介音を持たない音節構造を持つ。Hoàng Thị Châu (2009)は南部方言の特徴として介音の不在に言及している。本研究では、同じく南部方言の一つであるサイゴン方言の音節構造に介音を認めているが、北部方言に対して共起できる C₁が少なく、生起条件が異なる。これは、南部方言の元来の音節構造は(C₁)V(C₂)/T であった可能性を示唆している。クアンナム方言の先行研究では二重母音を認めているが、本結果では全て単母音として解釈している。

また、今回研究対象とした 5 地域に分布する方言はそれぞれ、2つの系統に分けられることが判明した。それぞれ、1. ダイロック・ディエンバン・ホイアン方言と 2. ズイスエン・タンビン方言でありトゥーボン(Thu Bồn)川を挟み南北に位置する。クアンナム祖方言から分岐する過程で、同様の音韻規則ならびに適用順序に従うが、その適用の有無により 2 形式へ分化したと考える。

2.3. クアンナム方言の位置づけ

Phạm (2017)等が指摘するように、Quảng Nam 方言に対する北中部方言の影響は少なからず想定され得る。しかしながら、Quảng Nam 方言音韻体系の共時態に見られる音韻的特徴のうち、音節構造、母音、末子音、声調などは南部方言と類似しており、先行研究同様、本研究においても音韻的特徴に基づき、クアンナム方言を南部方言の下位方言に分類する。なお語彙的特徴においては、中部方言の下位方言との共通性が見られる(通山 2019)。また先行研究が指摘する母音や韻に特異な音声的特徴をもつ方言は、同省内でも主に沿海地域ならびにトゥーボン川の中・下川流域に分布していることが分かっている(通山 2019)。南部地方は、ベトナム王朝の南部進出により 18 世紀半ばに完成したとされ、この南部地方で独自の形成を遂げた方言を南部方言と呼ぶ。クアンナム方言は南部方言の形成後にさらにそこから分岐、形成され現代の形式に至ったと考えられる。

3. 方法

3.1. データの収集

本研究で使用するデータは 2017 年 3 月～2018 年 8 月の間に実施されたフィールド調査により収集された。調査地はそれぞれ 1.ホイアン(Hội An)市、2.ディエンバン(Điện Bàn)市、3.ダイロック(Đại Lộc)県、4.ズイスエン(Duy Xuyên)県、5.タンビン(Thăng Bình)県である。調査は各地域ごとに母語話者 1 名の計 5 名に対して行われた。インフォーマントの出身、年齢などの詳細については、表 2 に示す。録音は屋外で PCM レコーダーを用いて行われた。比較対象としたハノイ方言、サイゴン方言のインフォーマント情報も併記する。

表 2 インフォーマント一覧

クアンナム省				その他			
ID	性別	出生年	出身	ID	性別	出生年	出身
DL	女	1980 年代	ダイロック県ダイミン社	HN	女	1970 年代	ハノイ市
DB	女	1970 年代	ディエンバン市ディエンホン社	SG	女	1990 年代	ホーチミン市
HA	女	1940 年代	ホイアン市カムナム区				
DX	女	1950 年代	ズイスエン県ズイハイ社				
TB	女	1950 年代	タンビン県ビンズオン社				

語彙リストは、フランス国立極東学院、フランス国立科学研究センター、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院が共同で作成した EFEO-CNRS-SOAS Word List for Linguistic Fieldwork in Southeast Asia 語彙リスト (Pain; Ferlus; Michaud et al., 2016)を基に作成した。

3.2. 祖形の再構

(7) クアンナム祖方言(PQN)の音韻体系

音節構造：(C₁)V(C₂)/T

頭子音 C₁：/*b, *m, *f, *t, *tʰ, *d, *n, *s, *ʃ, *l, *r, *t, *c, *ɲ, *i, *k, *kʰ, *ŋ, *kʷ, *kʰʷ, *ŋʷ, *y, *h/

母音 V：/*i, *e, *ɛ, *i, *ĩ, *ə, *a, *ã, *u, *o, *ɔ/

末子音 C₂：/*m, *p, *n, *t, *ŋ, *k, *ŋʷ, *kʷ, *i, *u, *ɔ/

声調 T：Tone 1(level [33])、Tone 2(low level [22])、Tone 3(broken [2ʔ4])、Tone 4(rising [25])、Tone 5(glottalized [2ʔ2ʔ])

4. 結果

クアンナム方言の成立を(I)、(II)の 2 段階に分け、各段階における音変化の傾向を示す。

段階(I) 南部方言(SV)からクアンナム祖方言への形成過程

- (a) 主母音の前後に発芽音が生起する
- (b) 発芽音は音韻化して C₂の スロットを占める
- (c) 非成節母音/*-i, *-u/と発芽音が融合する

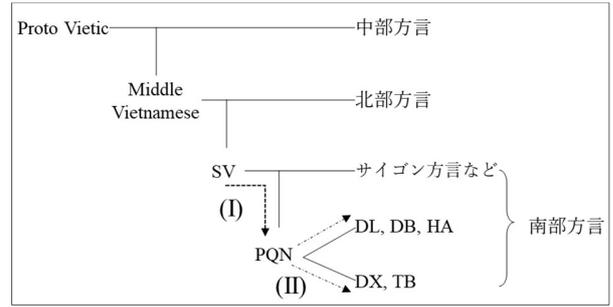


図 4 クアンナム方言の形成過程

(8) 段階(I)における音変化の例

	SV	PQN	DL, DB, HA, DX, TB	SG
二 hai	*hai ¹ >hǎai ¹ >hǒǎi ¹	>*hǒǎi ¹ /*hǒǎi ¹ /	/hǒǎi ¹ /[hǒǎi ¹ ~ hǒǎi ¹]	/hai ¹ /
星 sao	*sau ¹ >šǎau ¹ >šǒǎu ¹	>*šǒǎu ¹ /*šǒǎu ¹ /	/so ¹ /[šǒǎu ¹ ~ so ¹]	/sau ¹ /

段階(II) クアンナム祖方言から現代クアンナム方言への派生過程

- (d) 主母音の前後に発芽音が生起する
- (e) 発芽音は音韻化して C₂の スロットを占める
- (f) C₂に生起する非成節母音/-i, -u/が消失する

(9) 段階(II)における音変化の例

	PQN	DL, DB, HA	DX, TB	SG
天 tròi	*tǎi ²	>tǎũi ² /tǎi ² /	>tǎũ ² /tǎũ ² /	/tǎi ² /
猫 mèo	*mɛu ²	>mɛũ ² /mɛũ ² / >*mɛũ ²	>mɛũ ² /mɛũ ² /	/mɛu ² /
十 mưòi	*mi ²	>miũ ² /mi ² /	>miũ ² /miũ ² /	/mi ² /
話す nói	*noi ⁴ >*nǒũi ⁴	>*nǒũi ⁴ >nũ ⁴ /nũ ⁴ /	>nũ ⁴ /nũ ⁴ /	/noi ⁴ /

なお(I)、(II)ともに/*-i, *-u/以外の末子音ではこの変化は生じない。

5. 結論

以上より、本研究の分析結果は(10)のようにまとめられる。

- (10) ・クアンナム方言が南部方言群から分岐・派生する過程で適用された音変化を誘発した要因として、主母音前後における発芽音の生起と音韻化が挙げられる。
- ・クアンナム祖方言も現代クアンナム方言と同じく(C₁)V(C₂)/Tの音節構造を持つ。上述の発芽音の生起に起因するの音変化は、この音節構造を維持するために生じたと考える。
- ・上記音変化の適用の有無の違いにより、2種の下位方言へ分化したと考える。

本研究では、クアンナム方言の祖方言を再構し、その形成過程に生じた音変化と適用された音韻規則を分析した。その結果、一部の音変化は、発芽音の生起と音韻化により不安定になった音節構造を安定させるために生じたことが分かった。発芽音の音韻化は、末子音/*-j, *-u/をもつ音節でのみ生じるため、その適用条件は限定的であるものの、南部方言内部におけるクアンナム方言の分岐を決定づける音変化の1つであると言える。よって南部方言内部の分化による現代南部諸方言の形成過程において、音変化の過程で発芽音の生起と音韻化に着目することに一定の妥当性を見出すことができると結論づける。

6. 問題点と今後の課題

本研究では5名のインフォーマントのデータに基づき、クアンナム方言の共時的状況と通時的変化について報告した。特に南部方言からクアンナム祖方言が分岐する段階である(I)における音変化は、南部諸方言の形成過程で広く生じた可能性があり、南部方言の分岐を誘発したとの分析を提示する。段階(II)で生じた音変化はまた、音韻規則の適用の違いにより南部方言内部でさらに細かな派生が生じた可能性を示唆している。しかしこの仮説を検証するには、さらに多種・多系統の方言の通時的考察が必要であり、現時点で一般化することは難しい。今後の課題としてクアンナム方言以外の南部方言下位方言のデータを増やし、本研究で得られた分析結果との比較が必要である。今後はより包括的な視点からクアンナム方言及び南部方言の形成史を解明するべく、さらに分析を深めたい。

参考文献

- Cao Xuân Hạo (1986) “Nhận xét về các nguyên âm của một phương ngữ ở tỉnh Quảng Nam [Quảng Nam 省におけるある方言の母音の考察]”, *Ngôn ngữ*, 2: 22-29.
- Đặng Thu (1994) *Di dân của người Việt từ thế kỷ X đến giữa thế kỷ XIX* [10世紀から19世紀半ばのベトナム人の移民], Trung tâm nghiên cứu dân số và phát triển
- Hoàng Thị Châu (1991) “Về một ngôn ngữ lai ở Hội An - Đà Nẵng vào thế kỷ 18 [18世紀ホイアン・ダナンの外来語]”. 国際学会紀要 *Đô thị cổ Hội An, Đà Nẵng* 22, 23/8/1990: 161-168.
- , (2009) *Phương ngữ học tiếng Việt* [ベトナム語方言学], Đại học quốc gia Hà Nội
- Lý Toàn Thắng et al. (2006) *Những đặc trưng cơ bản của tiếng Quảng Nam và vị trí của nó trong hình thành chữ quốc ngữ* [クアンナム方言の基本的な特徴とクオックグー文字形成史における位置づけ], Sở Khoa học và Công nghệ Quảng Nam-Viện Ngôn ngữ học, Quang Nam.
- Pain, Frédéric. Ferlus, Michel. Michaud, Alexis. Phạm Thị Thu Hà. Ryan Gehrman (2016). EFEO-CNRS-SOAS word list for linguistic fieldwork in Southeast Asia, version 2. Identifier: oai:halshs.archives-ouvertes.fr:halshs-01068533. Available: <http://halshs.archivesouvertes.fr/halshs-01068533>.
- Phạm, Andrea Hòa. (2017) “The phonemicization of the vowel [a] in Quảng Nam Vietnamese”, *Historical Linguistics 2017*, Amsterdam: John Benjamins.
- Schubiger, Maria. (1970) *Einführung in die Phonetik*, Walter de Gruyter, Berlin. (M.シュービゲル. 小泉保 (訳) (1973) 『新版音声学入門』大修館書店).
- SHIMIZU Masaaki (2013) “The place of Quang Nam dialect in the history of velar finals in Vietnamese”, *International Conference on the Linguistics of Vietnam in the Context of Renovation and Integration*, University of Social Sciences & Humanities, Hanoi, Vietnam.
- Vương Hữu Lê (1974) “Những đặc tính của âm vị Việt ngữ [ベトナム語音素の特性]”, *Đại học Văn. Sài Gòn*, ホーチミン市 Van 大学学位論文.
- 通山絵美 (2019) 「ベトナム語クアンナム方言の音韻に関する共時的・通時的的研究」大阪大学学位論文.